

菑蕩本

泉鏡花

青空文庫

如月きさらぎのはじめから三月の末へかけて、まだしつとりと春雨に
 ならぬ間を、毎日のように風が続いた。北も南も吹ふきすさ荒あんで、戸
 障子を煽あおつ、柱を揺ゆぶる、屋根を鳴らす、物干棹ものほしざおを刎は飛ばとす—
 —荒磯あらいそや、奥山家、都会離れた国々では、もつとも熊を射た、
 鯨を突いた、崇たりの吹雪に戸を鎖さして、冬籠ごもる頃ながら—東京
 もまた砂埃ほこりの戦たたかいを避けて、家ごとに穴籠りする思い。
 意気な小家こいえに流連いつづけの朝の手水ちようずにも、砂利を含んで、じりり
 とする。

羽目も天井も乾いて燥いで、煤の引火奴に礫が飛ぶと、そのま
まチリチリと火の粉になつて燃出しそんな物騒さ。下町、山の手、
昼夜の火沙汰で、時の鐘ほどジャンジャンと打つける、そこもか
しこも、放火だ放火だ、と取り騒いで、夜廻りの拍子木が、枕に
響く町々に、寝心のさて安からざりし年とかや。

三月の中の七日、珍しく朝風ぎして、そのまま穩かに一日暮れ
て……空はどんよりと曇つたが、底に雨氣を持ったのさえ、頃
日の埃には、もの和かに視められる……じとじとした雲一面、
星はなけれど宵月の、朧々の大路小路。辻には長唄の流しも
聞えた。

この七の日は、番町の^{おおいちよう}大銀杏とともに名高い、二七の不動尊

の縁日で、月六斎。かしらの二日は大粒の雨が、ちようど夜店の出盛る頃に、ぱらぱらなまあつたか生暖なまい風に吹きつけたために——その癖すぐに晴れたけれども——丸潰れまるつぶとなつた。……以来、打続いた風ツ吹きで、銀杏こげえの梢も大童おおわらわに乱れて蓬おどろおどろ々々しかつた、その今夜は、霞に夕化粧で薄あかりにすらりと立つ。

堂とは一町ばかり間あわいをおいた、この樹もとの許もとから、桜草すみれ、堇すみれ、山吹やまぶき、植木屋みちの路みちを開き初めて、長閑のどかに春めく蝶々かんざし簪かんざし、娘たちよの宵出いでの姿すがた。酸漿屋ほおずきやの店から灯ともしが点れて、絵草紙屋みせ、小間物店みせの、夜よの錦にしきに、紅べにを織り込む賑にぎわいとなつた。

が、引続いた火沙汰のために、何となく、心々のあわただしさ、見附やぐらの火の見櫓とがすみが遠霞とがすみで露店の灯の映るのも、花つかいの使なと視ながめ

あえず、遠火で焙らるる思いがしよう、九時というのに屋敷町の
塀に人が消えて、御堂の前も寂寞としたのである。

提灯もやがて消えた。

ひたひたと木の葉から滴る音して、汲かえし、掬びかえた、杓の柄を漏る雫が聞える。その暗くなった手水鉢の背後に、古井戸が一つある。……番町で古井戸と言うと、びしょ濡れで血だらけの婦が、皿を持って出そうだけれども、別に仔細はない。……参詣の散った夜更には、人目を避けて、素膚に水垢離を取るのが時々あるから、と思うとあるいはそれかも知れぬ。

今境内は人気勢もせぬ時、その井戸の片隅、分けても暗い中に、あたかも水から引上げられた体に、しよんぼり立った影法師

が、本堂の正面に二三本燃え残った蠟燭の、横曇りした、七星の数の切れたように、たよりない明あかりかすかに幽かすかに映った。

びしゃびしゃ……水だらけの湿っぽい井戸端を、草履か、跣足か、沈んで踏んで、陰気に手水鉢の柱すがに縋すがつて、そこで息を吐つく、肩を一つ揺ゆすつたが、敷石の上へ、蹠よろよろ々々。

口を開あいて、唇赤く、パツと蠟ろうの火を吸った形の、正面の鰐わにぐ口ちの下へ、髯ひげのもじやもじやと生えた蒼あおい顔を出したのは、頬ほのこけた男であつた。

内へ引く、勢せきの無い咳せきをすると、眉ひそを顰ひそめたが、窪くぼんだ目で、御堂うちの裡うちを俯うつむ向むいて、覗のぞいて、

「お蠟ろうを。」

二

そう云つて、ほころ綻びて、たもとさき袂の尖でやつとつな繋がる、ぐたりと下へかさ襲
ねた、どくどく重そうなしろがすり白ひ緋なの浴衣の溢出はみだす、汚れて萎なえた
綿入のだらけた袖口へ、右の手を、手首を曲げて、肩を落して突つ
込つこんだのは、さいせん賽銭を探つたらしい。

が、チャリリともせぬ。

時に、本堂へむくりと立つた、大きな頭のまつくろ真黒まなのが、海坊
主のように映つて、上から三宝へのしかか伸懸ると、手がとうみょう燈明とうみょうに映
つて、新しい蠟燭を取ろうとする。

一ツ狭い間を措いた、障子の裡には、燈があかあかとして、二人居残った講中らしい影が映したが、御本尊の前にはこの雇和尚ただ一人。もう腰衣ばかり袈裟もはずして、早やお扉を閉める処。この、しよびたれた参詣人が、びしよびしよと賽銭箱の前へ立った時は、ばたり、ばたりと、団扇にしては物寂しい、大な蛾の音を立てて、沖の暗夜の不知火が、ひらひらと縦に燃える残んの灯を、広い掌で煽ぎ煽ぎ、二三挺順に消していたのである。

「ええ、」

とその男が压えて、低い声で纏るように言った。

「済みませんがね、もし、私持合せがございません。ええ、新し

いお蠟燭は御遠慮を申上げます。ええ。」

「はあ。」と云う、和尚が声の幅を押被せるばかり。鼻も大きければ、口も大きい、額の黒子も大入道、眉をもじやもじやと動かして聞返す。

これがために、寔れた男は言洩つて、

「で、ございますから、どうぞ蠟燭はお点し下さいませんように。」

「さようか。」

と、も一つ押被せたが、そのまま、遣放しにも出来ないのは、彼がまだ何か言いたそうに、もじもじとしたからで。

和尚はまじりと見ていたが、果しがないから、大な耳を引傾

げざまに、てのひらト掌を当てて、燈明の前へ、その黒子ほくろを明らさまに出した体ていは、耳が遠いからという仕方に似たが、この際、判然はつきり分るように物を言え、と催促をしたのである。

「ええ。」

とまた云う、男は口を利くのも呼吸いきだわしそうに肩を揺ゆる、：

：

「就きましては、真まことに申兼ねましたが、その蠟燭でございます。」

「蠟燭は分つたです。」

小鼻しわに皺を寄せて、黒子に網の目の筋を刻み、

「御都合じゃからお蠟は上げぬようにと言うのじゃ。御随意です。何か、代物を所持なさらんで、一挺、お蠟が借りたいとでも

言わるる事か、それも御随意です。じゃが、もう時分も遅いな。」

「いいえ、」

「はい、」と、もどかしそうな鼻息を吹く。

「何でございます、その、さような次第ではございません。それでございますから、申しにくいのでございしますが、おぼしめし思召を持ちまして、お蟻を一挺、お貸し下さる事にはなりますまいでございましょうか。」

「じゃから、じゃから御随意です。じゃが時刻も遅いでな、：見なさる通り、燈明をしめしておるが、それともに点つけるでますか。」

「それがでございます。」

と疲れた状さまにぐたりと賽銭箱の縁へりに両手を支ついて、両の耳に、
すくすくと毛のかぶさった、小さな頭をがっくりと下げながら、

「一挺お貸し下さいまし、……と申しますのが、御神前に備える
ではございません。私てまえ、頂いて帰りたいたのでございます。」

「お蠟を持って行くであすか。ふうむ、」と大く鼻おおきを鳴ならす。

「それも、一度お供えになりました、燃えさしが願ねがいたいののでご
ざいまして。」

いや、時節がら物騒千万。

「待て、待て、ちよつと……」

往来留どめの提ちようちん灯はもう消したが、一筋、両側の家の戸を鎖さし

た、寂さみしい町の真まん中なかに、六道の辻みちの通とほるべに、鬼が植かえた鉄

棒なぼうのごとく標しるしの残のこつた、縁日果はてた番町通どおり。なだれに帯板おびへ下

りようとする角かどの処ところで、頬ほお被かぶりした半纏はんてんぎ着ぎが一人、右側ひきしの廂

が下くだつた小家の軒下暗くらい中なかから、ひたひたと草履ぞうりで出でた。

声も立てず往来留どめのその杣くに並ならんで、ひしと足を留とどめたのは、

あの、古井戸の陰かげから、よろりと出でて、和尚おしょうに蠟燭ろうそくの燃もえさしを

ねだつた、なぜ、その手水鉢てすいひちの柄杓へしやくを盗ぬすまなかつたろうと思おもう、

船幽靈ふなゆうれいのような、蒼あおしよびれた男おとこである。

半纏着は、肩を斜はすつかいに、つかつかと寄つて、

「待てつたら、待て。」とドス声を洩くかすめて、一つしやくつて、頬被りから突出す頤あごに凄味すこみを見せた。が、一向に張合なし：
：対手あいては待てと云われたまま、破れた暖簾のれんに、ソヨとの風も無いように、ぶら下つた体ていに立停たちどまつて待つのであるから。

「どこへ行く、」

黙つて、じろりと顔を見る。

「どこへ行くかい。」

「ええ、宅へ帰りますでございます。」

「家うちはどこだ。」

「市ヶ谷田町でございます。」

「名は何てんだ、……」

と調子を低めて、ずっと摺寄^{すりよ}り、

「こう言うとな、大概生意気な奴^{やつ}は、名を聞くんなら、自分から名^な告れと、手数を掛けるのがお極^{きま}りだ。……俺はな、お前^{めえ}の名を聞いても、自分で名告るには及ばない身分のもんだ、可^いいか。その筋の刑事だ。分ったか。」

「ええ、旦那でいらつしやいますか。」

と、破れ布子^{ぬのこ}の上から見ても骨の触って痛そうな、瘦^やせた胸に、ぎしと組んだ手を解いて叩頭^{おしぎ}をして、

「御苦勞様でございます。」

「むむ、御苦勞様か。……だがな、余計な事を言わんでも可い。

名を言わんかい。何てんだ、と聞いてるんじゃないか。」

「進藤延のぶかず一と申します。」

「何だ、進藤延一、へい、変に学問をしたような、ハイカラな名じゃねえか。」

と言葉じりもしどろになつて、頤あごを引込ひっこめたと思うと、おかし

く悄しよげ気げたも道理こそ。刑事おとどと威おどした半纏はんぢん着は、その実町内の若い

もの、下塗したぬりの欣きん八ぱちと云う。これはまた学問をしなそうな兄あにい哥ご

が、二七講の景気けいきづけに、縁日よひの夜は縁起えんぎを祝つて、御堂ごどう一室ひとまど

処ころで、三宝を据たのもしして、頼母たのもし子を営いむ、……世話方せわがたで居残いざのこると……

……お燈明とんみの消々きえきえ時とき、フト魔まが魅さしたような、髪蓬かみぼろに、骨豁あらわなり

とあるのが、鰐わにぐち口くちの下したに立たち頭あらかわれ、ものにも事ことを欠あいた、断ことわ

るにもちよつと口実の見当らない、蠟燭の燃えさしを授けてもらつて、消えるがごとく門を出たのを、ト伸上つて見ていた奴。

「棄ててはおかれませんが、串戯じょうだんじゃねえ。あの、魔ものめ。

ご本尊にあやかつて、めらめらと背中に火を背負しよつて帰つたのが見えませんか。以来、下町は火事だ。僥倖しあわせと、山の手は静か

だつて。中やすみの風が變つて、火先が井戸端から舐なめはじめた、てつきり放火つげびの正体だ。見逃してやつたが最後、直ぐに番町は黒くろ焦こげさね。私が一番生捕いけどつて、御覧じろ、火事の卵を硝子ピイドロの中

へ泳がせて、追付おつけ金魚の看板をお目に懸ける。……」

「まつたく、懸念無量じゃよ。」と、当御堂の住職も、梓眼鏡わくめがねを揺ゆぶらるる。

講親こうおやが、

「欣八、抜かるな。」

「合点だ。」

四

「ああ、旨うまいな。」

煙草たばこの煙を、すばすばと吹く。溝石の上に腰を落して、打坐ぶつすわりそうに蹲しゃがみながら、銜くわえた煙管きせるの吸口が、カチカチと齒に当たて、歪ゆがみなりの帽子がふらふらとなる。……

夜は更けたが、寒さに震えるのではない、骨まで、ぐなぐなに

酔っているので、ともすると倒りそうになるのを、路傍みちばたの電柱の根に縋すがつて、片手喫ふかしに立続ける。

「旦那、大分いけますねえ。」

膝掛ひざかけを引抱ひんだいて、せめてそれにでも暖あたりたそうな車夫は、値きが極きつてこれから乗ろうとする酔客よっぱらいが、ちよつと一服で、提ち灯ようちんの灯で吸うのを待つ間ま、氷のごとく堅くなつて、催促がましく脚と脚を、霜柱に摺すり合あわせた。

「何？大分いけますね……とおいでなされると、お酌が附いて飲んでるようだが、酒はもう沢山だ。この上は女さね。ええ、どうだい、生酔なまよ本性たが違ちがわずで、間違の無い事を言うだろう。」

「何ならお供をいたしましょう、ええ、旦那。」

「お供だ？ どこへ。」

「お馴染様なじみでございませなあね。」

「馬鹿にするない、見附まつきで外濠そとぼりへ乗替えようというのを、ぐつすり寐ね込んでいて、真直まっすぐに運ばれてよ、閻魔えんまだ、と怒鳴られて驚いて飛出したんだ。お供もないもんだ。ここをどこだと思つてる。」

電車が無いから、御意の通り、高い車賃を、恐入つて乗ろうと
いうんだ。家数四五軒も転がして、はい、さようならば阿漕あこぎだろ
う。」

口を曲げて、看板の灯で苦笑して、

「まず、……極きめつけたものよ。当人こう見えて、その実方角が

分りません。一体、右側か左側か。」と、とろりとして星を仰ぐ。

「大木戸から向って左側でございます、へい。」

「さては電車路を突切つたな。そのまま引返せば可いものを、何の気で渡つた知らん。」

と真しんになつて打傾く。

「車夫くるまや、車夫ツて、私をお呼びなさりながら、横なぐれにおいでなさいました。」

「……夢中だ。よつぽどまいつたらしい。素敵に長い、ぐらぐらする橋を渡るんだと思つたつけ。ああ、酔つた。しかし可い心持だ。」とぐつたり俯うつむ向く。

「旦那、旦那、さあ、もう召して下さい、……串じょうだん戯だん じやない

と半分つぶや呟いて、石に置いた看板を、ト乗掛のっかかつて、ひよいと取る。

鼻せきの前を、その燈ひが、暗がりにスーツと上あがると、ハツ嚏くさめ、酔よっぱ漢らいは、細い箍たがの嵌はまった、どんより黄色な魂を、口から拔出されたように、ぽかんと仰向あおむけに目を明けた。

「ああ、待ったり。」

「燃えます、旦那、提灯を乱暴しちや不可いけません。」

「貸しなよ、もう一服吸附けるんだ。」

「燐寸マツチを上げまさあね。」

「味が違います……酔覚めの煙草は蠟燭の火で喫のむと極きまったもん

だ。……だが……心意気があるなら、鼻紙を引裂いて、行燈の火を燃して取つて、長羅宇でつけてくれるか。」
 と中腰に立つて、煙管を突込む、雁首が、ぼつと大きく映つたが、吸取るように、ぼつたりと紙になる。

「消した、お前さん。」

ないしよ
 内証で舌打。

霜夜に芬と香が立つて、薄い煙が濛と立つ。

くるまや
 「車夫。」

「何ですえ。」

「……宿に、桔梗屋と云うのがあるかい、——どこだね。」

「ですから、お供を願いたいんで、へい、直きそこだつて旦那、

御冥ごみょう加がだ。御祝儀と思召して一つ暖まらしておくんなさいまし、寒くつて遣やり切れませんや。」とわざとらしく、がちがち。

「雲助め。」

と笑いながら、

「市ヶ谷まで雇ったんだ、賃銭は遣るよ、……車は要らない。そのかわり、蠟燭の燃えさしを貰ゆつて行く。……」

五

さて酔よつぱら漢いは、山鳥の巢ぞめに騒見ふくろうく、梟こやしずという形で、も一度線路そめいろを渡越わたした、宿しゆくの中ほどを格子摺こやしずれに伸しながら、染色そめいろも

同じ、桔梗屋、と描かいて、風情は過ぎた、月明りの裏打をしたよ
うに、横店の電燈でんきが映る、暖簾のれんをさらりと、肩で分けた。よしこ
ことでも武蔵野の草に花咲く名所とて、廂ひさしの霜も薄化粧、夜半よわの
凄すげさも狐きつね火びに溶けて、情なさけの露となりやせん。

「若い衆しゆ、」

「らっしやい！」

「遊あそぶぜ。」

「難ありがと有あう様で、へい、」と前掛まえかけの腰かがを屈かめる、揉手もみでの肱ひじに、
ピンと芴はねた、博多帯はかたおびの結目むすびめは、赤坂奴やっこの髯ひげと見た。

「振ふらないのを頼たのみます。雨具あまがしを持たないお客おきだよ。」

「ちやんとな、」

と唐棧とうざんの胸を劃しきつて、

「胸三寸。……へへへ、お古い処、お馴染なじみ効がいでございます、へへへ、お上んなはるよ。」

帳場から、

「お客様ア。」

まんざらでない蹠あしおと音で、トントンと踏む梯子はしご段。

「いらつしやい。」と……水へ投げて海津かいずを掬しやくう、澆はつらつ刺とした声なら可いいが、海綿あぶくに染む泡波のごとく、投げた齒はに舌のねばり、どろんとした調子を上げた、遣手やりて部屋のお媪おばさんというのが、茶そばきりきりを搦からませた、遣放やりつしな立膝たてひざで、お下りを這曳しよびいたらしい、さめた饅頭うどんを、くじやくじやと啜すする処——

横手の衝立ついたてが稲塚いなづかで、火鉢の茶釜ちやがまは竹の子笠、と見ると
 暖ぬくめんみみず麵めん蚯蚓みみずのごとし。惟おもんみくちばしとがれば嘴くちばしの尖とがつた白面コンコンの狐コが、古ふる蓑みのを褌う
ちかけ襠ちかけで、尻尾つまの棲つまを取あつてあらわ躡あれわそう。

時さつしも颯さつと夜嵐よあらしして、家中うち穴あなだらけの障子しょうじの紙かみが、はらはらと
 鳴なる、霰あられの音ね。

勢いきおひきえき辟おひきえき易やすせざるを得えずで、客人きやくじんぎよつとした体ていで、足あしが窘すくんで、
 そのまま欄干らんかんに凭より懸かると、一小間いっしょうかん抜ぬけたのが、おもしろに打うたれ
 て、ぐらぐらと震動しんどうに及およぶ。

「わあ、助たすけてくれ。」

「お前まへさん、可いい御機嫌ごきげんで。」

とニヤリと口くちを開ひけた、お媼おばさんの齒はの黄色きいろさ。横よこに小楊枝こようじを

使うのが、つぶつぶと入る。

若い衆飛んで来て、腰を極めて、爪先で、つつい、

「ちよつと、こちらへ。」

と古畳八畳敷、狸を想う真中へ、性の抜けた、べろべろの赤

かもうせん

毛氈。四角でもなし、円でもなし、真鍮の獅噛火鉢は、古

寺の書院めいて、何と、灰に刺したは杉の割箸。

こいつを杖という体で、客は、箸を割って、肱を張り、擬勢を

示して大胡坐おおあぐらにどうとなる。

「ええ。」

と早口の尻上りで、若いものは敷居際に、梯子段見通しの中腰。

「お馴染様は、何方様で……へへへ、つい、お見外れ申しまして

「ございまして、へい。」

「馴染はないよ。」

「ごじょうだん御串戯を。」

「まっただ。」

「では、その、へへへ、」

「何が可笑おかしい。」

「いえ、その、お古い処を……お馴染効がいでございまして、ちよつとお見立てなさいまし。」

彼は胸を張って顔を上げた。

「そいつは嫌いだ。」

「もし、野暮なようだが、またお慰み。日比谷で見合と申すので

はございません。」

「飛んだ見違えだぜ、気取るものか。一ツ大野暮に我輩、此家の
おいらんに望みがある。」

「お名ざしで？」

「悪いか。」

「結構ですとも、お古い処を、お馴染効でございまして。……」

六

対方は白露と極つた……桔梗屋の白露、お職だと言う。……

……遣手部屋の蚯蚓を思えば、
什か、狐塚の女郎花。

で、この名ざしをするのに、客は妙な事を言った。

「若い衆、註文というのは、お照しだよ。」

「へい、」

「内に、居るだろう。」

「お照しが居りますえ？」

と解せない顔色。

「そりや、無いことはございませんが、」

「秘すな、尋常に顕せろ。」と真赤な目で睨んで言った。

「何も秘します事はございません、ですが御覧の通り、当場所も疾の以前から、かように電燈になりました。……ひきつけの遊
君にお見違えはございません。別して、貴客様など、お目が

高くつていらつしやいます、へい、えッへへへへ。もつとも、その、ちとあちらへ、となりまして、お望みとありますれば、」

「だから、望みだから、お照しを出せよ。」

「それは、お照しなり、行燈あんどんなり、いかようともいたしますんで、とにかく、……夜も更けております事、遊君おいらんの処を、お早く、どうぞ。」

と、ちらりと遣手部屋へ目を遣つて、此奴こいつ、お荷物だ、と仕方で見せた。

「分らないな。」

と煙管きせるを突込つっこんで、ばつたり置くと、赤毛氈あかもうせんに、ぶくぶくして、擬印まがい伝の煙草入は古池を泳ぐ体ていなり。

「女は蠟燭だと云つてるんだ。」

お媪おばさんが突掛つつかけ草履くわで、片手を懐ふちに、小楊枝しょうやじを襟先えりさきへ揉挿もみさしながら、いけぞんざいに炭取すすを跨またいで出て、敷居越しきりこに立つたなり、汚点しみのある額越かぶしに、じろりと視みて、

「遊あそ君くんが綺麗きれいで柔順おとなしくつて持もてさいすりや言種いぐさはないんじやないか。遅おそいや、ね、お前まへさん。」

と一ツ叱おこつて、客きやくが這奴しや言いおうで擡もげた頭あたまを、しやくつた頤あごで、無だんまり言おしつで圧着おしつけて、

「お勝かつどん、」と空くうを呼よぶ。

「へーい。」

途端とたんに、がらがらと鼠ねずみが騒さわいだ。……天井裏てんじやうらで声こゑがして、十五

六の当の婢ちひは、どこから顕あらわれたか、煤すすを繋つないで、その天井から振ぶ下げたように、二階の廊下を、およそ眠いといった仏頂面ぶつどうめんで、ちよろりと来た。

「白露さん、……お初しよかい会かいだよ。」

「へーい。」

夢が裏返ったごとく、くるりと向うむきになって、またちよろり。

「旦那こちらへ、……ちようどお座敷がございます。」

「待て、」

と云ったが、遣手の劍幕けんまくに七分の恐怖おそれで、煙草入を取って、やツと立つと……まだ酔っている片膝かたひざがぐたりとのめる。

「蠟燭はどうしたんだ。」

「何も御会計と御相談さ。」と、ずつきり言う。

……彼は、苦い顔で立上つて、勿論広くはない廊下、左右の障子へ突懸つつかけるように、若い衆の背中を睨にらんで、不服らしくずんずん通つた。

が、部屋へ入ると、廊下を背後うしろにして、長火鉢を前に、客を待つ気構えの、優しく白い手を、しなやかに鉄瓶の蔓つるに掛けて、見るとも見ないともなく、ト絵本の読みさしを膝に置いて、膚薄はだそ
うな縞縮緬しまぢりめん。撫肩なでがたの懐手、すらりと襟すべをくれないじゆばにすべらした、紅の襦はだ袢はだの袖に片手を包んだ頤おとが深く、清らか耳許みみもとすつきりと、湯上
りの紅絹もみの糠袋ぬかぶくろを皚齒しらはに嚙かんだ趣して、頬も白々と差俯向さしうつむ

いた、黒縹くろしゆす子冷たき雪なす頸うなじ、これが白露かと、一目見ると、後姿でゾツとする。――

「河、原、と書くんだ、河原千平。」

やがて、帳面を持って出直した時、若いものは、軸で、ちよつと耳を搔かいて、へへへ、と笑った。

「貴客あなた、ほんとの名を聞かして下さいましな。」

犬を料理そうな卓子ちやぶだい台の陰ながら、膝に置かれた手は白し、凝じつと視みられた瞳は濃し……

思なわず情さけが五体に響いて、その時言った。

「進藤延一……造兵……技師だ。」

七

「こういう事をお話し申した処で、ほんとはなさりますまい。第一そんな安店に、容色きりようと云い氣質きだてと云い、名も白露はくろで果敢はかないが、色の白い、美しい婦おんなが居ると云つては、それからが嘘らしく聞えるでございましょう。

その上、癡言たわごとを吐つけ、とお叱りを受けようと思ひますのは、娼妓じやうぎでいて、まるで、その婦おんなが素地きじの処女むすめらしいのでございませぬ。ええ、他の仁にはまずとにかく、私てまえだけにはまったくでございしました。

なお怪しいでございましょう……分けて、旦那方は御職掌で、

人一倍、疑り深くいらつしやいますから。」――

一言ずつ、呼いき氣を吐つくと、骨だらけな胸がびくびく動く、そこへ節くれだった、爪てのひらの黒い掌ををがばと当てて、上うえした下に、調子を取つて、声もみだを揉みだ出す。

佐内坂の崖下、大おおどぶ溝を通おれこりを折おれこ込んだ細路地の裏長屋、棟割むねわりで四軒だちの尖とつばずれ端で……崖うねうねざかうらの畝なだ々なだ坂がが引窓から雪なだ顔れれ込みみそうな掘立ほったて一室ひとま。何にも無い、畳すりむの摺すりむ剥むけたのがじめじめと、蒸れ湿むったその斑まだらが、陰と明るみに、黄色に鼠むしけらに、雑多の虫むしけら虻へりの湧わいて出た形に見える。葉鉄落フリキしの灰の濡れた箱火鉢の縁へりに、じりじりと燃える陰気な蠟燭を、舌のようになめらかして、しよんぼりと蒼あおざめた、髪おどろの毛おどろの蓬おどろなのが、この小屋の……ぬしと言

いたい、墓から出た状さまの進藤延一。

がつしとまた胸を絞つて、

「でありますが、余りお疑い深いのも罪なものでございます。」

と、もの言う都度、肩から暗くなつて、蠟燭の灯に目ばかりが希代に光る。

「疑うのが職業だつて、そんな、お前めえ、狐しろうの性じやあるまいし、

第一、僕はそのね、何も本職というわけじやないんだよ。」

となぜか弱い音ねを吹いた……差向さむかひいをずり下さがつて、割膝かしくまで畏かしこまつ

た半纏着はんぢぎの欣八刑事、風受かぜうけの可よい勢いきおいに乗じて、土蜘蛛つちぐもの穴あなへ深ふか

入かいらいに及およんだ列卒せこの形で、肩かたばかり聳そびやかして弱身じやくみを見せじと、

擬勢ぎせいは示すが、川柳せんりゅうに曰く、鍔塗つてぬりの形かたちに動く雲うみの峰みねで、蠟燭ろうそくの

影わだかまに蟠まる魔物まの目から、身体からだを遮さりたそうに、下塗したまの本体ほんたい、しきりに手を振ふる。……

「可いいかね、ちよいと岡おか引ひッて、身軽みかろな、小意気せういぎな処ところを勤こめるんだ。このお前めえ、しつきりなし火沙汰ひさたの中なかさ。お前まへ、焼跡やけどで引ひ火奴くちを捜たずねような、変あやな事ことをするから、一つ素引しよびいてみたまでのもんさね。直ただぐにも打縛ふんじばりでもするようにな、お前まへ、真劍しんけんになつて、明あかり白かりを立てる立てるッて言いわあ。勿論もちろん、何なにだ、御用ごようだなんて威おどかしたには威おどしましたさ、そりや発奮はつみというもんだ。

明あかし白しを立てます立てますッて、ここまで連れて来るから、途中で小用せうようも出来できずさね、早はやい話はなしが。

隣家となりは空屋からやだと云いうし、……」

と、ほおかぶり 頬被ほおかぶり のままで、後を見た、肩を引いて、

「一軒隣は按摩あんまだと云うじやねえか。取附とつきの相角がおでん屋だ
ツて、かつと飲んだように一景氣附げしやういたと思や、夫婦で夜なしに
出て、留守は小児こどもの番をする下性げしやうの悪い爺じいさんだと言わあ。早
い話がじや、この一棟四軒長屋の真暗まつくらな図体の中に、……」

と鑊こてを塗ぬつて、

「まあ、可いやね、お前めえ、別にお前、怪しいたツて、何も、ねえ、
まあ、お互に人間に成りはねえんだから、すぐにさようならにし
ようと思つた。だけれど、話の口明くちあけが、宿しゆくの女郎だ。おまけに
別嬪べっぴんと来たから、早い話が。」

でまあ、その何だ、私わつしも素人じやねえもんだから、「

と目潰めつぶしの灰の気さ。

「一ツ詮せんさく索をして帰ろう、と居坐つたがね、……気にしなさんな。別にお前の身体からだを裏返しにして、綺麗に洗いだてをしようと言うんじゃねえ。可いから、」

と云う中うちにも、じろりと視みる、そりや光るわ、で鍔を塗って、

「大目に見てやら。ね、早い話が。僕は帰るよ、気にしなさんな。」

「ええ、いや、私てまえの方で、気にしない次第わけには参りません。」

欣八、ぎよつとして、

「そうかね、……はてね。……トオカミ、エミタメはどんなものだ。」と字あざなは孔明、琴を弾く。

八

「で、その初会の晩などは、見得に技師だつて言いました。が、
私はその頃、小石川へ勤めました鉄砲組でございしますが、
夜もお不動様で一所だつけ。そうかい、そいつは頼母たのもしいや。」
と欣八いささか色を直す。

「見なさいます通りで、我ながら早やかように頼母しくなさ過ぎ
ます。もつとも、車夫の看板を引抜いて、肩で暖簾を分けながら、
遊ぶぜ、なぞと酔つた晩は、そりや威勢が可ようがした。」

と投首しつつ、また吐息といき。じつと灯ともを瞻みまもつたが、

「ところで、肝心のその燃えさしの蠟燭の事でございます。

嘘まことか、真まことかは分りません。かねて、牛鍋のじわじわ酒に、夥間なかま

の友だちが話しました事を、——その大木戸向うで、蠟燭の香においを、

芬ぶんと酔よ爛いただれた、ここへ、その脳へ差込まれましたために、ふと

好ものずき事な心が、火取虫といった形で、熱く羽ばたきをしたのでご

ざいます。

内には柔やさしい女房もございました。別に不足というでもなし、

……宿しゆくへ入ったというものは、ただ蠟燭の事ばかり。でございま

すから、圧おしつ附つけに、勝手おんなな婦おんなを取持たれました時は、馬鹿々々し

いと思いましたが、因果おんなとその婦おんなの美しさ。

成程、桔梗屋の白露か、玉の露でも可い位。

けれども、うち楼なり、場所柄なり、……余り綺麗なので、初手は

ものすこ物凄かったのでございます。がいかにも、その病気があるため

に、——この容きりよう色、三絃いともちよつと響く腕で——蹴けころ同然な

はきだめ掃溜へ落ちていると分りますと、一夜妻のこの美しいのが……

と思う嬉しさに、……今の身で、恥も外聞もございません。筋も

骨もとろとろと蕩とろけそうになりました。……

まくらもと枕頭あんどんの行燈の影で、ええ、その婦おんなが、二階廻しの手にも

なげや投遣らないで、寝巻てまえに着換えました私の結城木綿ゆうきもめんか何か、ごつご

つしたのを、やわらかもの絹物そでだたみのように優しく扱って、袖そでだたみ畳たたみにしてい

たのでございます。

部屋着の腰の巻帯には、破れた行燈の穴の影も、蝶々のように見えて、ぞくりとする肩を小夜具で包んで、恍惚うつとりと視ながめていまますと、畳んだ袖を、一つ、スーと扱しごいた時、袂たもとの端で、指ゆび尖さきを留めましたがな。

横顔がほんのりと、濡れたような目に、柔かな眉まみえが見えて、

貴方あなたは御存じね——」

延一は続けさまに三つばかり、しやがれた咳せきして、

「私てまえに、残らず自分の事を知っていて来たのだらうと申しまして、

——頂かして下さいましな、手を入れますよ、大事ござんせんか

と念を押して、その袂から、抜いて取ったのが、右の蠟燭でご

ございます。」

「へい、」と欣八は這身はいみに乗出す。

「が、その美人。で、玉で刻んだ独鈷とっこか何ぞ、尊いものを持ったように見えました。」

遣手も心得た、成りたけは隠す事、それと言わずに逢わせた、

とこてまえう私てまえは思う。……

——どちらの御蠟でござんすの——

また、そう訊くのがお極きまりだと申します。……三度のもの、湯水より、蠟燭でさえあれば、と云う中うちにも、その婦おんなは、新あらのより、燃えさしの、その燃えさしの香においが、何とも言えず快い。

その燃えさしもございます。

一度、神仏の前に供えたのだ、と持つ手もわななく、体を震わして喜ぶんだ、とかねて聞いておりましたものでございますから、その晩は、友達と銀座の松喜で牛肉をしたたか遣りました、その口で、

——水天宮様のだ、人形町の——

と申したでございます。電車の方角で、フト思い付きました。

銀座には地藏様もございますが、一言で、誰も分るのをと思いましてな。ええ。……」

とじろじろと四辺あたりをみまわす。

欣八は同じように、きよろきよると頭を振る。

九

「お聞き下さい。」

と瘦やせた膝を痛そうに、延一は居直つて、

「かねて噂を聞いたから、おいらんの土産にしようと思つて、水天宮様の御蠟の燃えさしを頂いて来たんだよ、と申しますと、端き然ちんと居い坐ざを直して、そのふつくりした乳房へ響くまで、身に染みて、鳩みず尾おちへはつと呼吸いきを引いて、

——まあ、嬉しい——

とちやんと取つて、蠟燭を頂くと、さもその尊さに、生は際えぎわの曇つた白い額から、品物は輝いて後光が射さすように思われる、と

申すものは、婦おんなの氣の入れ方でございまして。

どうぞでございましょう。これが直じき近所の車夫の看板から、今しがた煙草を吸つて、酒さけ粘ねばりの唾つばきを吐いた火の着いていたやつじゃございますまいか。

なんぼでも、そうまで真しんになつて嬉しがられては、灰吹を叩いて、舌を出すわけには参りません。

実は、とその趣を陳のべて、堪忍しな、出来心だ。そのかわり、今度は成田までもわざわざ出向くから、と申しますと、婦おんなが莞にっこ爾りして言うんでございます。

これほどまでに、生命いのちがけで好きなんですもの、どこの、どうした蠟燭だか、大概は分ります。一度燃えたのですから、その香におい

で、消えてからどのくらい経たつたかが知れますと、伺つた路順で、
 下谷したやだが浅草だが推量が付くんです。唯ただ今下いますつたのは、手に
 取ると、すぐに直き近い処ところだとは思いました、……では、大宗だいそう
 寺じ様のかと存じましたが、召上つた煙草の粉こなが附着くつついています
 し、御縁日ではなし、かたがた悪いたずら戯わらに、お欺かぎだとは知つたん
 ですが、お初会の方に、お怨みを言うのも、我わが儘ままと存じて遠慮
 しました。今度ツからは、たとい私をお誑だましでも、蠟燭の嘘うそを仰お
 つしや有るとほんとうに怨みますよ、と優しい含ふくみみ声こゑで、ひそひそ
 と申すんで。

もう、實際嘘は吐つくまい、と思つたくらいでございます。

部屋着を脱ぐと、緋ひの襦じゆ袷ばんで、素足がちらりとすると、ふツ、

と行燈を消しました。……底に温あたたかみ味あじを持つたヒヤリとするのが、酒の湧わく胸へ、今にもいい薫かおりで颯さつと絡まっわるかと思うと、そうでないので。――

カタカタと暗がりで筆筒たんすの抽斗ひきだしを開けましたがな。

――水天宮様のお目に掛けましょう――

そう云つて、柔らかい膝の衣摺きぬずれの音おとがしますと、燐寸マッチを※と摺すつた。」

「はあ、」

と欣八は、その※とした……瞬まじきする。

「で、朱塗の行燈の台へ、蠟燭ちようを一挺ちよう、燃えさしのともに火を点して立てたのでございます。」

と熟じつと瞻みまる、とここの蠟燭ろうそくが真直まっすぐに、細ほりと灯あかりが据すわった。

「寂然しん然としておりますので、尋常ただのじやない、と何となくその暗い灯に、白い影があるらしく見えました。

これは、下谷の、これは虎の門の、飛んで雑司ぞうしヶ谷のだ、いや、つい大木戸のだと申して、油皿の中まで、十四五挺、一ツずつ消しちや頂いて、それで一ツずつ、生なま々なまとした香においの、煙……と申して不思議にな、一つ色ではございません。稲荷いなりさま様のは狐色と申すではないけれども、大黒天のは黒く立ちます……気がいたすのでございます。少し茶色のだの、薄黄色だの、曇った浅黄がございまして。

その燃えさしの香においの立つ処を、睫毛まつげを濃く、眉を開いて、目を

恍惚うつつとりと、何と、香においを散らすまい、煙を乱すまいとするように、
 掌てのひらで蔽おほつて余さず嗅かぐ。

これが葉はだなら、身体中からだ、一筋ひとすぢずつ黒髪くろかみの尖さきまで、血ちと一所あまねに遍あまね
 く膚はだを繞めぐつた、と思うと、くすぶりもせずになお冴さえる、その白
 い二の腕うでを、緋ひの袖そでで包みもせず、……」

聞く欣八きんぱちは変がな顔色かおしよく。

「時に……」

と延一のぶいちは、ギクリと胸むねを折よつて、抱かかえた腕うでなりに我が膝ひざに突伏つっぷ
 して、かツかツと咳せきをした。

その臉に朱をそそ灌ぐ……汗の流るる額をぬぐ拭つて、

「……時に、その枕まくらもと頭の行燈あんどんに、一挺消さない蠟燭があつ

て、寂然しんと間まを照てらしておりますんでな。

——あれは——

——水天宮様のお蠟です——

と二つ並んだその顔が申すんでございます。灯の影には何が映るとお思いなさる、……気になることおびただ夥しい。

——消さないかい——

——堪忍して——

是非と言えは、さめざめと、名の白露が姿を散らして消えるば

かりに泣きませんが。推量して下さいますし、愛想^{あいそづか}尽^つしと思^{おも}うがま
 まよ、鬼^{おに}だか蛇^{じや}だか知^しらない男^{おとこ}と一つ処^{ところ}……せめて、神^{かみ} 仏^{ほとけ}の
 前で輝^{かがや}いた、あの、光^{ひかり}一^{いつ}ツ暗^{やみ}に無^なうては恐^{こわ}怖^わくて死^しんでしま^まうの
 ですもの。もし、氣^きにな^なつたら、貴^{あなた}方^{なた}ばかり目^めをお瞑^{つむ}りなさいま
 し。——と自分^{じぶん}は水晶^{すいせい}のよう^{よう}な黒^{くろ}目^めがち^ちのを、すつきり睜^{みは}つて、
 ——昼^{ひる}さえ遊^{あそ}ぶ人^{ひと}がござんすよ、と云^いう。

可^よし、神^{かみ} 仏^{ほとけ}もあ^あれば、夫^{おとこ} 婦^{めかけ}もあ^ある。蠟^{ろう} 燭^{そく}が何^{なに}の、と思^{おも}う。その
 蠟^{ろう} 燭^{そく}が滑^{すべ}々^{すべ}と手^てに触^ふる、……扱^{しご}帯^きの下^{した}に五^ご六^{ろく}本^{ぽん}、襟^{えり}の裏^{うら}にも、
 乳^ちの下^{した}にも、幾^{いく}本^{ぽん}となく忍^{しの}ばしてあ^あるので、ぎよつとしま^ました。
 残^{のこ}らず、一^{いつ}度は神^{かみ} 仏^{ほとけ}の目^めの前^{まへ}で燃^もえ輝^{かが}いた^{いた}のでござ^ざいませ^{せん}よう、
 ……中^{なか}には、口^{くち}にする^{する}のも憚^{はば}か、荒^あ 神^{かみ}も少^{すく}くはあ^ありませ^{せん}ん。

ばかりでない。果ては、その中から、別に、綺麗な絵の蠟燭を
 一挺抜くと、それへ火を移して、銀簪ぎんかんざしの耳とに透す。まずどう
 するとお思いなさる、……後で聞くとこの蠟燭の絵は、その婦おんなが、
 隙ひまさえあれば、自分で割青ほりもののように縫針で彫つて、彩色いろどりをす
 るんだそうで。それは見事でございます。

また髪は、何十度逢つても、姿こそ服装なりこそ変りますが、いつ
 も人柄かに似合わない、あの、仰向あおもむけに結んで、緋ひや、浅黄しほりや、絞しほり
 の鹿かの子の手絡てがらを組んで、黒髪で巻いた芍薬しやくやくの苔つほみのように、
 真まん中なかへ簪かんざしをぐいと挿す、何転進てんじんとか申すのにはばかり結う。

何と絵蠟燭を燃したのを、簪で、その鬘まげの真中へすくりと立て
 て、烏羽玉うばたまの黒髪に、ひらひらと篝かがりび火のひらめくなりで、右に

もなれば左にもなる、寝返りもするのでございます。

——こうして可愛がつて下さいますなら、私や死んでも本望です——

とこれで見えるくらいまた、白露のその美しさと云つてはない。が、いかな事にも、心を鬼に、爪を驚わしに、狼の牙を嚙鳴かみならしても、森で丑うしの時参詣まいりなればまだしも、あらたかな拜殿で、巫女みこの美女を虐なぶりごろ殺しにするようで、笑靨えくぼに指も触れないで、冷汗を流しました。……

それから悩乱。

因果と思切れません……が、

——まあ嬉しい——

と云う、あの、容子ようすばかりも、見て生命いのちが続けたさに、実際、成田へも中山へも、池上、堀の内は申すに及ばず。——根も精も続く限り、蠟燭の燃えさしを持っては通い、持っては通い、身も裂き、骨も削りました。

昏くらんだ目は、昼遊びにさえ、その燈ともに眩まぶしいので。

手足の指を我と折つて、頭髪ずはつを掴つかんで身悶みもたえしても、婦おんなは寝るのに蠟燭を消しません。度かさなるに従つて、数を増し、燈ひを殖ふやして、部屋中、三十九本まで、一度に、神々の名を輝かして、そして、黒髪に絵蠟燭の、五色の簪を燃して寝る。

その媚なまめかしさと申すものは、暖かに流れる蠟燭より前まへに、見るものの身が泥になつて、熔とけるのでございます。忘れません。

因果と業と、早やこの体ていになりましたれば、揚代あげだいどころか、宿までは、杖すがに縋すがつても呼吸いきが切れるのでございましょう。所詮の事に、今も、婦おんなに遣わします気で、近い処の縁日だけ、蠟燭の燃えさしを御合力おごうりよくに預ります。すなわちこれでございます。」
 と袂たもとを探つたのは、ここに灯ひともしたのは別に、先刻さつきの二七のそれであつた。

犬のしきりに吠ほゆる時——

「で、さてこれを何にいたすとお思いなさいます。懺悔ざんげだ、お目に掛けるものがある。」

「大變だ、大變だ。何だつて和尚さん、奴もそれまでになつたんだ。気の毒だと思つてその女がくれたんだらうね、緋ひの長襦袢ながじゆばん

をどうだろう、押入の中へ人形のように坐らせた。胴へは何を入れたかね、手も足もないんでさ。顔がと云うと、やがて人ぐらいの大きさに、何十挺だか蠟燭を固めて、つるりとやっぱり蠟を塗つて、細工をしたんで。そら、燃えさしの処が上になつてるから、ぼちぼち黒く、女鳴神おんななるかみツて頭でさ。色は白いよ、凄すごいよ、お前さん、蠟だもの。

私わっしあ反そつたねえ、押入の中で、ぼうとして見えた時は、——それをね、しなしなと引出して、膝へ横抱きにする……とどうです。欠火鉢かけひばちからもぎ取つて、その散髪ざんぎりみたいな、蠟燭の心へ、火を移す、ちろちろと燃えるじやねえかね。

ト舌は赤いよ、口に締りをなくして、奴め、ニヤニヤとしなが

ら、また一挺、もう一本、だんだんと火を移すと、幾筋も、幾筋も、ひよろひよると燃えるのが、搦からみ合つて、空へ立つ、と火尖ひさきが伸びる……こうなると可恐おそろしい、長い髪まっかの毛の真赤まっかなのを見るようですぜ。

見る見る、お前さん、人前りようひじも構う事か、長襦袢すねの肩を両りようひじ肱すそへ巻込んで、汝てめえが着るすねように、胸すねにも脛からにも搦からみつけたわ、裾すそがずるずると畳ひへ曳く。

自然とほてりがうつるんだってね、火の燃える蠟燭は、女のぬくみだツさ、奴おれが言う、……可ようがすかい。

頬ほっぺた辺たを窪くぼますばかり、齒くっつを吸込んで附着くっつけるんだ、串じようだん戯だんじゃねえ。

ややしばらく、魂が遠くなつたように、静じつとしていと思うと、
 襦袢じゆばんの緋さつが颯さつと冴さえて、揺れて、靡なびいて、蠟ろうに紅あかい影とが透とおつて、
 口惜くやしいか、悲かなしいか、可哀あわれなんだか、ちらちらと白露を散らして泣
 く、そら、とろとろと煮えるんだね。嗅かぐさ、お前さん、べろべ
 ろと舐なめる。目から蠟燭の涙を垂らして、鼻へ伝つたわらせて、口へ
 垂らすと、せいせい肩で呼吸いきをする内に、ぶるぶると五体を震わ
 す、と思うとね、横倒れになつたんだ。さあ、七顛しちてん八倒ぱつとう、で
 沼ぬまみたいな六畳どろどろの部屋を転摺のめずり廻る……炎あが搦からんで、青
 蜥蜴おとかけの躡のたう打つようだ。
 わつし
 私わがあ夢中で逃出した。——突いきなり然見附かけつへ駈か着けて、火の見へ駈か
 上けあがろうと思つたがね、まだ田町から火事も出さずさ。

何しろ馬鹿だね、馬鹿も通越しているんだね。」

お不動様の御堂を敲いて、夜中にこの話をした、
下塗の欣八
が、

「だが、いい女らしいね。」

と、後へ附加えた了。簡が悪かった。

「欣八、気を付けねえ。」

「顔色が変だぜ。」

友達が注意するのを、アハハと笑消して、

「女がボーツと来た、下町ア火事だい。」と威勢よく云っていた。
が、ものの三月と経たぬ中にこのべらぼう、たった一人の女房の、
寝顔の白い、緋手絡の円鬘に、蠟燭を突刺して、じりじりと燃

して火傷やけどをさした、それから発狂した。

但し進藤とは違ちがう。陰気でない。縁日とさえあればどこへでも押掛おしかけて、鰻塗こてぬりの変な手つきで、来た来た来た来たと踊りながら、

「蠟燭をくんねえか。」

怪あやしむべし、その友達が、続いて——また一人。………

大正二（一九一三）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/ で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

菟蕪本

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>